

2021年7月4日

大井バプテスト教会

説教題 『赦すこと』はむずかしい」マタイ18章21～35節

主任牧師 加藤 誠

「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい」(マタイ18章22節)。

私たちにとって「赦すこと」はとてもむずかしいものです。あるときペトロが尋ねました。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか」。一般的な罪ではなく、わたしに対する不誠実な裏切りなど、簡単には赦すことのできない罪を犯した者をどうしたらよいかという問いです。先日も池袋での自動車暴走事故で愛する妻子の命を奪われた方が裁判で自らの罪を認めない加害者への深い失望と赦しがたい思いを吐露されていました。日常的な人間関係の中で起こる小さな衝突なら主イエスが言われる「赦しなさい」という意味もわかる。けれども池袋の事故のように愛する者を不条理に奪われ癒されることのない深い傷を負った時に「それでも赦さなければならぬのか」という疑問が湧いてきます。いったい主イエスが語られた赦しはどこまでの赦しなのか。弟子たちもそういう疑問を抱いたのでしょう。

「主よ、何回赦すべきでしょうか。七回までですか？」。

「仏の顔も三度まで」というように、当時のユダヤ教も「三度までは赦しなさい」と教えていたようです。「七回までですか」とは、いつも「神の永遠の愛と赦し」を語られていた主イエスの思いを汲んで「一般に教えられている三回の倍以上である七回」という限度をペトロなりに考えたのかもしれませんが。いずれにしろ「赦しには限度がある。際限ない赦しはありえない」。これがペトロの考えでした。

ところが主イエスは驚くべき言葉を発せられます。「七どころか、七の七十倍までも赦しなさい」。もちろんこれは「 $7 \times 70 = 490$ 回」という回数に意味があるのではなく、「何度でも際限なく赦せ」「数えるな」ということです。「赦しの回数を数えている」限り(!)、それは「赦し」ていることにはならないからです。

この「際限なき赦し」を説明するために、主イエスは「1万タラントンの借金を棒引きにしてもらった家来」のたとえを語られました。1タラントンは労働者の一日の賃金であり、仮に1万円とすると一万タラントンは1億円です。「自分は1億円の借金を赦されながら、自分に百万円借りている者を赦せない」。そのために家来は王から厳しく叱られ、牢屋に投げ込まれてしまったのです。

この家来はまさに私たちのことです。他人には厳しく、自分には大いに甘い。他人を傷つけた不誠実を棚に上げて、他人から受けた傷は「決して赦せない」と厳しく糾弾する。そのように自分に甘く、他人に厳しい、私たちの「二重基準」を厳しく問うています。「あなたは神さまから底なしの赦しを受けていながら、どうして他人の罪を赦せないのか?」。この主イエスの言葉は正しく反論できません。

「ただし」です。実は主イエスは「赦し」に関して、別の主旨の言葉を発しておられます。今朝読んだ「仲間を赦さない家来のたとえ」の直前、「兄弟の忠告」の

前半部分。「兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。聞き入れなければ…二人又は三人を連れて行き…教会に申し出、それでもだめなら、その人を異邦人か徴税人と同様に見なしなさい」と。「あれっ？」と思いませんか。「赦しの回数を数えるな。何度でも赦せ」と言いながら「忠告せよ」と言い、「忠告の回数を数えて、受け入れないなら異邦人や徴税人のように見なせ」とは。正反対の矛盾した言葉のように見えます。いったい主イエスが教えられた「赦し」とはどういうものなのでしょうか。マタイ福音書はわざわざ「赦し」に関する主イエスの言葉を二つ並べて、「主イエスの真意をよくよく考えよ」と促しているかのようです。

まず考えるべき点として、主イエスの「赦し」は「その罪はなかったことにする、水に流す」ということではなさそうです。例えば主イエスを十字架に追いやった人々の罪はどのように赦されるのか。その罪は決して消えないし、消せないものです。なぜなら神の愛と正しさに敵対するものだからです。ですからその罪は決して消えない。にもかかわらず、主イエスの十字架の犠牲と執り成しの祈りにより、その人の手錠は外され、罪から「解放される」のです。

それゆえ主イエスの「赦し」は「**罪を憎んで、罪人を憎まず**」と言えるかと思えます。「あなたのしたことは罪である。しかしわたしはあなたを赦す」。私たちに対する神の深い赦しは、日々罪を重ねている私たちの「手錠」を解放します。しかしそれは「**無罪放免**」ではなく「**有罪放免**」なのです。そのことを忘れたなら「仲間を赦さない家来のたとえ」のように神から「お前は大きな勘違いをしている！」と厳しく叱られることになるのです。

ですから池袋の事件の場合も被告人の過失をきちんと検証し、認定された過失の事実に本人がきちんと向かい合うよう促すことは、主イエスが語られた「赦し」と矛盾しません。あるいは佐々木和之さんがルワンダで取り組んでいる 27 年前の大虐殺における「和解と赦し」の働きにおいても、加害者たちが自分の罪ときちんと向かい合うことは「赦し」の大切なプロセスであると佐々木さんは言います。自分が神の前に犯した罪ときちんと向かい合うこと。それは本人が神さまから「十字架における赦し」の宣言を受けていくために必要なプロセスだからです。自らの罪を誤魔化し続ける限り、私たちは神さまの深い赦しの宣言を聴くことができないし、その赦しのもとに新しく生きることができないのです。一方で癒されることのない深い傷を負った被害者はどうすることができるのか。主イエスが言われる「赦しなさい」は「神さまに委ねなさい」という意味であるとわたしは理解します。「赦せない思いをいつまでも抱えていることは、あなた自身を苦しめ続ける。その苦しく悲しい思いをわたしに委ねなさい。わたしが正しく裁く」。その意味で主イエスは「赦しなさい」と私たちに教えられたのだと思うのです。

主イエスの「赦し」への招きは、日々罪を重ねないと生きていけない私たちが、それでも神さまの深い愛と赦しのもとに「新しく隣人と共に生き直していく」ための招きです。この主イエスの祈りを大切に受けたいのです。